

PHOTO MESSAGE 2008

縮小する流氷

二〇〇四年の早春、氷の海に何度も船を出した。そして出会ったのはクラカケアザラの赤ちゃん。地元の漁師でさえ、めったに見ないという。海をさまよい、やがて解けて消える氷の上で誕生した命。この星には神秘と美しさが満ちあふれ、それが無限であることをつくづく思う。

その翌年から三年続けて、南下する流氷は極端に貧弱となった。もちろんアザラの赤ちゃんに会うことはかなわない。

オホーツクの流氷は確実に縮小している。北海道にはまずまずの量が押し寄せた今年だが、オホーツク海全体では平年の面積には及ばなかった。流氷の縮小がさらに進むとアイヌアサリが減少し、それはオキアミの減少にも直結する。もちろん漁業への影響も避けられない。



獲物を追ってやって来るオジロワシ



北海道のオホーツク海は、北半球で最も南で流氷が見られる場所だ。千島列島が海を湖のように閉ざし、そこにアムール川から大量の真水が注ぎ込むなど、いくつかの条件が整うことではじめて凍る。重要なのは大陸から吹き出す寒気であり、ほんの数度の温暖化で北海道に流氷が来なくなるという。

流氷は温暖化を計るセンサーだ。縮小傾向の流氷は、わたしたちが地球で生き続ける上での危機を警告している。わたしたちの消費や欲望がこの星の絶妙な仕組みを狂わし、それが何の罪もない生き物たちの命を奪い、わたしたち自身にも異常気象などとして危害が及び寄る。

北海道の冬の厳しさ、流氷の神秘を過去の記憶にしないことが、人の営みを守ることだと思う。

忍び寄る温暖化の危機



クラカケアザラシ



オオワシ

凍ったばかりのシャープベツ状の海氷は「泥のような水」という意味で「氷泥（ひょうでい）」と呼ばれる